

小特集③

教皇ベネディクト 16 世の退位と 新教皇フランシスコの即位 —日本のメディアはどのように報じたか—

1. ベネディクト 16 世の退位

①退位に至る経緯

ローマ教皇庁は2月11日、教皇ベネディクト16世が2月28日午後8時をもって退位する意向であると発表した。教皇の生前退位は1415年のグレゴリオ12世以来600年ぶりで、異例のことである（なお、グレゴリオ12世は教会大分裂を收拾するために廃位を宣告され、それを承諾したのであって、自発的意思によるものではない）。教皇は、2月11日に開かれた枢機卿会議で、「高齢のため、私の体力は教皇職の遂行にふさわしくないと確信するに至った。変化が早い現代、教会統治には心身両面の強さが必要だが、ここ数ヶ月で体力が衰えた」と説明したとされる（毎日・夕2/12）。教皇は、2007年にドイツ人ジャーナリストとのインタビューで、「体力的、心理的、精神的に務めが果たせなくなった場合は辞任する権利と責任がある」と語ったことがあり（朝日2/13ほか）、これまでも退位の噂がなかったわけではない。側近、親族によれば、数ヶ月前には退位の決意を固めていたとのことである（読売2/13ほか）。

四旬節初日の「灰の水曜日」にあたる2月13日、教皇はサンピエトロ大聖堂でミサを捧げた。在任中に一般信者が参加できる最後のミサとなったため、閉祭の挨拶が終ると、「ビバ・パパ（教皇万歳）」「ありがとう」などの声上がり、8千人の信者が数分間にわたる「スタンディング・オベーション」で教皇を見送った。教皇はミサにおいて、教会内の分裂に警鐘を鳴らし、「利己主義と対立を克服するように」と語った（毎日2/14）。この発言について、バチカン紙『オッセルバトーレ・ロマーノ』の元副編集長スピデルコススキー氏は、教皇庁国務長官のベルトーネ枢機卿と前国務長官のソダーノ枢機卿の対立を指した発言と指摘する（毎日2/16）。教会指導部の内紛については、教皇が退位の意味を固める遠因と報じるメディアも散見された（読売3/1ほか）。

教皇は2月24日、日曜恒例の「正午の祈り」に姿を表し、「主は私に、今まで以上に祈りと黙想に専念するよう求めました。しかし教会を投げ出すわけではありません。私の年齢と力に応じたやり方で奉仕し続けます」と話した（朝日2/25）。窓際に立つ教皇の姿を一目見ようと世界各国から10万人の信者がサンピエトロ広場集った（読売2/25ほか）。26日、教皇庁は、ベネディクト16世の退位後の職名を「名誉教皇」とし、「聖下」の尊称も引き続き使用すると発表した（産経2/27ほか）。ただし実務からは完全に離れ、ペットの猫とともにバチカン内の修道院に暮らし、祈りや研究、執筆中心の生活を送るとされている（読売3/1）。

②退位への評価

生前退位については、（問題山積の中での退位であることには触れつつも、「潔い引き際」（信濃毎日3/1）、「勇気ある決断」（産経2/17）と肯定的な評価が目立ち、教皇の最大の功績はこの退位の決断であったという評価さえ見られた（日経3/3ほか）。今後、生前退位が慣習化する可能性を示唆する向きもある（読売3/1）。この評価は、教皇がカトリック信者の精神的な指導者であるだけでなく、世界に12億人の信者を抱える巨大組織のトップとして、

また、主権国家であるバチカンの国家元首として、聖俗兼ね備えた指導力が求められることを反映したものであろう(読売2/15ほか)。グレゴリアン大学の菅原教授は「ヨハネ・パウロ2世が死の間際まで職責をまっとうする姿は人々に感動を与えた」としつつも、「教会の統治は数ヶ月止まった」と指摘した(朝日2/13)。

教皇の業績に関する評価は厳しいものが目立った。ただし、前任者のヨハネ・パウロ2世については、「他の宗教との和解を進めるなど、保守的なカトリック教会を穏やかに改革」(週刊文春2/28ほか)した点が賞賛される一方で、ベネディクト16世の「教義に厳格で、保守的な価値観を重視し、同性愛や人工妊娠中絶、安楽死などに強く反対」(朝日・夕2/12ほか)した点が批判されるのはバランスを欠く印象を受ける。この2点において、両者の基本姿勢は非常に似通っていたと言ってよい。ベネディクト16世は、エイズ予防のための避妊具使用を認めないとしたことを人道的見地から非難されているが(日経2/13ほか)、ヨハネ・パウロ2世も避妊具の使用や人工妊娠中絶、同性愛、安楽死はもとより、女性叙階や離婚についても断固反対したことが知られている。

また、確かにベネディクト16世は、即位の翌2006年にドイツの大学で講演した際、ビザンツ帝国皇帝の、イスラム教の預言者ムハンマドが「邪悪と残酷さをもたらした」との発言を引用し、「ジハード(聖戦)は神に反する」と述べたことから、イスラム世界の反発を招いた。しかし、その後は、トルコでモスクを訪れて大歓迎を受け、ヨハネ・パウロ2世に次ぎ、モスクを訪問した2人目の教皇となった。2009年にはロシアとバチカンの国交を樹立し、11世紀に分裂した東方正教会との和解の先鞭をつけた(毎日2/12)。2011年3月には、著書でイエス・キリストの死にユダヤ人全体が責任を負うとの見方を否定し、ユダヤ人社会から歓迎された(信濃毎日・夕2/12)。2012年にはシリアで内戦が激化する中、キリスト教徒とイスラム教徒が共存する隣国のレバノンを訪問し(東京2/13)、その後、謁見用の公式語にアラビア語を採用している[→『ラク便り』57号40頁参照]。

ベネディクト16世が、資金面での透明性の向上、および女性の役割の強化などの改革に取り組んでいたとの指摘もあるが(毎日2/13)、目だった成果を上げたとは言いがたい。「バチカン銀行」の通称で知られ、マネーロンダリング疑惑の絶えない「宗教事業協会」の改革を指示したものの、改革派と守旧派の争いで頓挫したとされる(読売2/15)。また、在任中には、カトリック教会の聖職者らによる未成年への性的虐待が世界中で相次ぎ発覚し、2012年には教皇宛の私信等、内部文書が流出する事件がおきたが、対応の遅れが隠蔽やもみ消しとも受け止められた[→『ラク便り』55号42頁、57号40頁参照]。

ヨハネ・パウロ2世に比べてカリスマに欠け(産経2/13)、前任者のような分かりやすく派手な活躍はしなかった(東京2/13)との評が目立つが、教会内からは、「学者教皇」の名にふさわしく、「教理を、こんなに分かりやすく説く教皇はいない」との声が聞こえてくる(読売3/1)。

2. 新教皇フランシスコの即位

① 今回のコンクラーベの概要

ベネディクト16世の退位表明を受け、後任選びの話題は日本でも巷間ににぎわせた。1978年までの450年にわたり、教皇の座はイタリア人が占めていたが、ヨハネ・パウロ2世(ポーランド人)、ベネディクト16世(ドイツ人)と、イタリア外の教皇が続いたため、今回こそイタリア

ア人教皇が誕生するのではないかという予想も流れた。しかし、カトリック信者の40%がラテンアメリカに集中し、欧州は23%と伸び悩んでいるのに対し、昨今アフリカが15%まで教勢を伸ばしている(信者数は5年で1.2倍)こともあり、ガーナのタークソン枢機卿、ブラジルのシェレル枢機卿、アルゼンチンのサンドリ枢機卿のほか、カナダ、アメリカ、フィリピン、ナイジェリア等、欧州外の枢機卿の名前が次々と取りざたされた。

3月4日、新教皇を決定するコンクラーベの日程等を決める枢機卿会議が始まったが、米国人枢機卿が拙速なコンクラーベ開催に疑問を呈し、会議は紛糾した(朝日3/8ほか)。教皇庁内部の枢機卿(いわゆる「官僚派」)は選挙を早く始めようとし、海外から集った「現場派」は、この機会に教会改革について時間をかけて討論することを希望したためとされる(朝日3/7ほか)。

このように、欧州 vs. 非欧州、官僚派 vs. 現場派、改革派 vs. 保守派といった様々な対立軸を抱えたまま、3月12日、コンクラーベが始まり、選挙権のある80歳未満の枢機卿の内115人での投票が始まった(2人欠席。選出には3分の2以上の得票を要する)。13日午後、5回目の投票で、ブエノスアイレス大司教のホルヘ・マリオ・ベルゴリオ枢機卿の選出が決まった。南米からの教皇選出は史上初、イエズス会士の教皇も史上初、また、フランシスコを名乗る教皇も史上初と、初めてづくしの選出となった。新教皇の「同性婚は認めないが、同性愛が存在する現実には許容する」という穏健な姿勢や、バチカン中枢での勤務経験がなく、数年来の一連の醜聞の責任を問われない立場にあったこと、南米出身であるがイタリア移民の子弟であることなど、広い支持を集めやすい条件が揃っていたようである(読売3/14ほか)。最終的に、圧倒的多数の90票を獲得したとの情報もある(毎日3/16)。ベルゴリオ枢機卿は2005年のコンクラーベでも、ベネディクト16世に次ぐ2位の票を得たとされているが、自分を支持しようとした枢機卿に対して、ベネディクト16世に投票するよう懇願したとの逸話も残っている(毎日3/15)。

午後7時過ぎ、新教皇はサンピエトロ大聖堂のバルコニーに姿を現し、「ボナ・セーラ!(こんばんは)」とイタリア語で(ラテン語ではなく)5万人の聴衆に呼びかけ、「(教皇が兼務する)ローマ司教を選ぶ選挙なのに、私の同僚の枢機卿たちは世界の果て(アルゼンチン)まで探しに行ったようですよ」との発言で、広場は笑いにつつまれた(朝日・夕3/14)。17日、15万人の信者が集った初の日曜日の祈りの集いでも、「ほんの少しのいつくしみが世界をより温かくする」と平易な言葉で語り、信者の心をつかんだ(東京3/18ほか)。

国民の9割がカトリック信者と言われる故郷アルゼンチンで歓喜の渦が広がったのは当然として[→アルゼンチン参照]、ヒスパニック系人口の増加するアメリカのオバマ大統領もこれを祝福した(毎日・夕3/14)。一連の報道では、選出に至ったベルゴリオ枢機卿のほか、アフリカ出身の枢機卿と並び、北米出身の枢機卿が常に候補に数えられるなど、カトリック教会の核が欧州外へと拡散する様子を印象付けた。

②新教皇の評価

多くのメディアがアッシジの聖フランシスコに由来する教皇名を選んだ(信濃毎日3/17)新教皇が、いかに親しみあふれる人物かをこぞって書きたて、謙譲と清貧ぶりを賞賛するエピソードを掲載している。教会活動では社会奉仕を重視する「現場主義」を貫いてきたが(産経3/15ほか)、3月14日、選出後初のミサでは114人の枢機卿を、「信仰をないがしろに

すれば、教会ではなく、単なる慈悲深いNGOになってしまう」(毎日 3/15)と激しい言葉で鼓舞したことが報じられた。

また、妊娠中絶や避妊に反対する保守的な立場を取り(毎日 3/15)、同性婚に強く反対したために、アルゼンチンのフェルナンデス大統領に「まるで中世の宗教裁判だ」と非難されたこともある一方で、未婚の母親が産んだ子の洗礼を拒否する神父たちを、「中絶せずに勇気を出して産んだ少女たちを教会はこんなふうに扱うのか」と叱責したこともあるという(信濃毎日・夕 3/18)。今後バチカンが漸進的な改革を進めるとしたならば、この絶妙な「バランス感覚」が成否の鍵を握るかもしれない。

3月28日、復活祭前の「洗足の儀式」をバチカンの大聖堂ではなく、ローマ市内の少年院で行い、教皇として初めて少女の足を洗うなど(従来は、イエスの使徒になぞらえて男性聖職者の足を洗う風習であった)、独自色を打ち出している(朝日 3/30)。選出直後のスピーチ以来、一貫して「教皇」ではなく、「ローマ司教」という呼称を自ら使っている点も特徴的と言えよう。ただし、保守派からは、立場をわきまえない行動、大衆迎合との批判も既に出始めている(毎日 4/5)。

他方、新教皇の経歴に一点の曇りもないわけではない。政治学上の一般的な理解として、1960～70年代に解放の神学を生み出し、カトリック教会が民主化運動の原動力となったブラジルと比べ、軍政下のアルゼンチンでは政権幹部が共産主義から国を守る「良きカトリック信者」を自任し、カトリック教会もこれに迎合したとされる。新教皇についても、イエズス会の若い2人の司祭が軍事政権に拷問を受けたにもかかわらず、助けなかったとの批判がある(ただし、本件については、2人が命だけは助かるよう奔走した、また、活動家を教会にかくまった等のエピソードも語られている)(信濃毎日・夕 3/18)。

ともあれ、現状では、メディア戦略、イメージ戦略の枠内で成功を収めつつある、と言えるだろうか。

[文責：加藤久子]